

【研究資料】

サンスクリット原文で『般若心経』を読む

大 崎 正 瑠

目 次

1. はじめに
2. サンスクリット原文について
3. 各語句について
4. 日本語訳の試み
5. 英語訳の試み

要 旨

『般若心経』は、インドで初期の大乗経典成立過程の中で膨大な般若経の一つとして、紀元後2－4世紀頃に書かれたものと推定される。仏陀の入滅後約500～700年を経ている。著作者および正確な著作年・場所は不明である。『般若心経』には、小本と大本があるが、『般若心経』と言えば通例小本を指し、ここでは小本を取り上げる。

『般若心経』は、日本では非常に人気があり、沢山のの人々に誦読されている。しかし大半の人は漢訳文を日本式で読み唱えており、サンスクリット原文を読む人は、非常に稀である。サンスクリット（梵語）が、日本人には極めて難解な言語であること、および日本人なら大抵は多かれ少なかれ漢訳文を読めて理解できることに主な原因があるだろう。だからといって原文を読まなくてよいとは言えない。一度は原文を読んでみるべきである。

その理由は、まず漢訳文は訳文であり原文ではない。訳文は訳者の視点・個性といういわばフィルターを通した解釈である。さらに漢訳文には、サンスクリット原文にある語句・文章が抜け落ちていたり、逆に原文に無いものが付け加えられたり、順序が逆になっているところがある。サンスクリットと漢語は全く異なる言語のために、文章から受取る感じが異なる。まず表音文字と表意文字の差がある。サンスクリットは印欧語族に属するため、同族の英語・独語・仏語などの単語や文法にどこか似ていると感じるところがあるが、漢文にはこのような類似点をまず感じない。サンスクリットの文法は複雑すぎるくらいだが、これに比べると漢語は文法がないに等しく見える。これは品詞・性・数・格・態・時制などの区別にも表れる。このような観点からも漢訳文を介する間接的

方法でなく、まず原文を直接読んでみることに意義がある。

1. はじめに

『般若心経』は、日本では人口に膾炙し、また大乘仏教への入口であるとも言える。この内容を論じるには、他の般若經典や大乘經典のコンテクストを充分理解した上で論じなければならないという前提がある。しかし筆者にはそのような知識が充分累積されていないとは言えない。またこれまで一般向けで梵語からの詳細な解説書には出会っていない。本稿は、単純にサンスクリット原文から直接読んでみたらどうなるか、そしてどうしてそうなるか、という疑問から生まれた。深い内容の吟味より文法書と梵英辞典を基に梵語原文を日本語に訳してみたという文法的・語彙的な考察の意味合いが強いと言える。原典からの直訳であるので、中には漢訳文經由の日本語訳とニュアンスの違う訳が出て、それは自然の成り行きであり、仕方がない。日本語訳には、原則として梵英辞典 Monier-Williams と Edgerton に基づいた。

文中では、語句について日本語で説明することもあるが、文章の流れの中で略語を使うこともある。ここで用いた略語は次の通りである。

m.: 男性, n.: 中性, f.: 女性, sg.: 単数, pl.: 複数, N.: 主格, L.: 処格, adj.: 形容詞, adv.: 副詞, pref.: 接頭辞, pp.: 過去受動分詞。

2. サンスクリット原文について

仏陀は、活動した場所の言葉・古代マガダ語で説法したので、最初仏教の經典や戒律は、古代マガダ語で伝えられた。そして仏教が地域的に広まり各地に僧伽が増えると各現地語で伝えられたとのことである。古代から中世にかけてインド亜大陸などで使われてきたサンスクリットが、当時インドでバラモン階級など知識階級の間で使われていた。現在インドでは公用語のヒンドゥー語、準公用語の英語に次いで22の指定語の一つとしてサンスクリットがあるが、使用者数では100位以下で少数である。

最初の經典として、紀元前1世紀頃にパーリ語で『ニカーヤ』が作られ、南伝としてスリランカ・東南アジアに伝わった。そしてサンスクリットでも『阿含経』(アーガマ)が作られ、北伝として中国・チベット・朝鮮・日本に伝わった。この北伝がサンスクリット、南伝がパーリ語の伝統はその後も続く。日本ではサンスクリットの『般若心経』小本が法隆寺に、同じく大本が奈良長谷寺に秘蔵されている。なお出自はドイツであるが、イギリスで生活し文献学・東洋学・インド学を研究した Max Müller (1823-1900) は、日本にある写本などにに基づき、校訂英訳を行った。

サンスクリットの表記は、時代・地域により多様で、紀元前3世紀頃にはグラーフミータ文字、4世紀頃からグプタ文字、その後悉曇文字に由来する梵字、7世紀頃からこれと多少異なるナーガリー文字が使用されてきた。さらに10世紀頃からデーヴァ(神)という言葉を付けたデーヴァナーガリー文字が使われてきた。18世紀末英国の W.Jones が、

サンスクリットと西欧諸国語との親縁関係を指摘して以来、西欧のサンスクリットに対する関心が高まった。ローマ字表記はこれ以降と推測される。19世紀初頭に H.H.Wilson が、インドで A Dictionary of Sanskrit and English を刊行した。1855-1875年にドイツの Otto Böhtlingk und Rudolf Roth は、7巻本の梵独辞典を刊行した。1899年に英国の Sir Monier Monier-Williams (1819-1890) は、上述の梵英辞典を編纂し、見出し語にローマ字表記を併用した。

『般若心経』は、約1800年前に出来たもので、時に文字も変えながら、転写の際の違いも含みながら、文章としてあるいは文法的に100%完璧とは言えないところもある。日本で発見された梵語版写本よび翻訳版（漢語訳、チベット語訳、蒙古語訳など）相互間、あるいはテキスト間でも微妙に異なるところがある。従って複数の解釈や推測が可能な箇所が幾つかあり、厄介である。ここでは中村元が校訂したテキストを基準とした。

<サンスクリット原文>

Namas Sarvajñāya. āryāvalokiteśvaro bodhisattvo gambhīrāyām prajñāpāramitāyām carayām caramāṇo vyavalokayati sma: pañca skandhās, tāmś ca svabhāvasūnyān paśyati sma. iha Śāriputra rūpaṃ sūnyatā, sūnyatāiva rūpaṃ. rūpān na pṛthak sūnyatā, sūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ. yad rūpaṃ sā sūnyatā, yā sūnyatā tad rūpaṃ. evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni. iha Śāriputra sarvadharmāḥ sūnyatālakṣaṇā anuṭpannā aniruddhā amalāvimalā nonā na paripūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra sūnyatāyām na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ. na cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi, na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraśtavya-dharmāḥ, na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñāna-dhātuḥ. na vidyā nāvidyā na vidyākṣayo nāvidyākṣayo yāvan na jarāmaraṇaṃ na jarāmarāṇakṣayo na duḥkha-samudaya-nirodha-mārgā, na jñānaṃ na prāptiḥ. tasmād aprāptitvād bodhisattvānām prajñāpāramitām āśritya viharaty a-cittā varaṇaḥ. cittāvaraṇa-nāstitvād atrasto viparyāsātikrānto niṣṭhanirvāṇaḥ. tryadhvavyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñāpāramitām āśrityānuttarām saṃyaksambodhiṃ abhisambuddhāḥ. tasmāj jñātavyaṃ prajñāpāramitā-mahāmantra mahāvidyāmantra ’nuttaramantro ’samasama-mantraḥ, sarvaduḥkhapraśamaṇaḥ. satyam amithyatvāt prajñāpāramitāyām ukto mantraḥ, tad yathā: gate gate pāragate pāra-saṃgate bodhi svāhā. iti Prajñāpāramitā-hṛdayaṃ samāptam.

<中村・紀野『般若心経・金剛般若経』<ワイド版> pp.185-186>

3. 各語句について

漢訳文を参考程度に並列したが、サンスクリット文と漢訳文は、文や語句の順序・有無について必ずしも相互に一致していないところがある。

❖ Namas Sarvajñāya. āryāvalokiteśvaro bodhisattvo : 前半：漢訳なし／後半：観自在菩薩
【試訳】全知の人に礼。聖なる観自在菩薩は、

namas は、namas-(n.) 「礼」「敬礼」で、数・格により変化しない。namas は、インド

などで一般的に行われている挨拶の *namaste* の中にある。これは、*namas* 「敬礼」「服従」 + *te* (前接語) 「あなたに」 (第2人称・単数・為格) の組み合わせである。実際には、両手を合わせ、指を上に向けて軽く会釈をする。日本でも仏前で行う。

sarvajñāya は、*sarva-* 「すべて」 + *jñā-* (adj.) 「知っている」で、複合語を構成し、合わせて *sarvajña-* (adj.) 「全知の (人)」の男性・単数・為格である。大本から傍で瞑想している仏陀に対しての礼と推察される。

āryāvālokiteśvaro は、*ārya-* (adj.) が「聖なる」「高貴な」「尊敬すべき」、*ava-* (pref.) が「遠離・下方」、*lokita-* (pp.) が√*lok-* 「見る」の過去受動分詞、*īśvara-* (adj.) が「能力のある」で、*avalokiteśvara-* 「世界を自在に見渡すことのできる (人)」の男性・単数・主格である。*-as* + (有声子音) > *-o* と連声した。これは、「観自在菩薩」のことで、慈悲をつかさどる菩薩である。漢訳文には、*ārya-* の部分がない。

bodhisattvo は、*bodhi-* (m.,f.) 「悟り」 + *sattva-* (m.,n.) 「生けるもの」「衆生」「人間」で、*bodhisattva* 「菩薩」の男性・単数・主格である。「菩薩」は、「悟りを求めて修行中の者」「求道者」である。*-as* + (有声子音) > *-o* と連声した。

❖ *gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇo vyavalokayati sma: pañca skandhās,*
行深般若波羅蜜多時 照見五蘊

【試訳】深い智慧の完成の修行を実践していた時に、五つの要素があると見極めた。

まず *gaṃbhīrāyāṃ* は、*gaṃbhīra-* (adj.) 「深い」の女性・単数・処格で、次語を修飾する。

prajñāpāramitāyāṃ は、*prajñāpāramitā-* の女性・単数・処格である。*prajñā-* (f.) 「智慧」は、*pra-* (pref.) 「あまねく」 + *jñā-* (adj.) 「知っている」で、「あまねく知っている (こと)」が本来の意味である。修行に必要な「英知・見識」のこと。漢訳文では音写で「般若」である。

pāramitā には2説あり、① *pārami-tā: parama-* (adj.) 「最高」の女性形 + *tā* (抽象名詞を作る接尾辞) で「完成」、② *pāram-i-tā: pāra-* (adj.) 「向こうへ」(副詞的用法) + *itā* (語根√*i-* 「行く」の過去受動分詞 *ita-* の女性形) で、「到彼岸」。結局 *prajñāpāramitā-* (f.) は、「智慧の完成」または「智慧による到彼岸」という意味となる¹⁾。全体では格限定複合語を構成している。漢訳文では、この部分を音写にしている。

caryāṃ は、語根√*car-* 「実行する」に *-ya* がついた未来受動分詞「修行すべきこと」あるいは単に「修行」の女性・単数・対格。*caramāṇo* は、語根√*car-* に *-māṇa* がついた現在分詞 *caramāṇa-* 「実践する」の男性・単数・主格。語尾が *-as* + (有声子音) > *-o* と連声した。*caryāṃ* と合わせて「修業を実践している」という意味となる。なお大乘における最高の六つの修行を「六波羅蜜」という²⁾。

vyavalokayati は、*vi-* (pref.) 「離れて」が、異なる母音の前で連声して *vy* になった。*ava-* (pref.) は、「下に、離れて」、*lokayati* は、語根√*lok-* 「見る」の使役活用語幹 *lok* + *aya* > *lokaya* の単数・第3人称・現在形で、合わせて *vyavalokayati* は「見極める」という意味となる。これに過去を表す *sma* が付加された。漢訳文では過去時制が表されていない。

pañca- (card.) は、「五」。*skandhās* は、*skandha-* の男性・複数・主格。これは本来「肩

「肩の重荷」「集塊」の意味である。人間の世界を構成する「要素」で、煩惱の元になる。漢訳文の「蘊」は、「集積」のこと。五蘊とは、「色」「受」「想」「行」「識」の各蘊（後述）。

❖ *tāms ca svabhāvaśūnyān paśyati sma.* : 皆空

【試訳】それらは、その本性において空であると見抜いた。

tāms は、連声の原則により *tān + (ca) > tāms* となった。*tān* は、指示代名詞 *tad-* 「それ」の男性・複数・対格である。*ca* は英語の *and* に相当するが、位置が異なる。

svabhāva- は、*sva-*(adj.) 「自分の」「自体の」 + *bhāva-*(m.) 「存在」で、全体としては「本性」「実体」「自性」などの意味である。*bhāva* の語根は、 $\sqrt{bhū-}$ 「～となる」「ある」である。次の *śūnyān* と複合語を構成している。漢訳文では、この部分が訳されていない。

śūnyān は、*śūnya-*(adj.) 「空」の男性・複数・対格。他に候補があるが、主要な国語辞典によれば、「空」は、今や仏教用語として日本語にもなっている。内容は、「世の中すべてのものは、因縁によって仮にできたもので永久不変の実体や自我はない」というもの。結局「悟る」ためには、何事にも「とらわれない」「執着しない」ことが求められる。「空」は、仏陀の涅槃から400年ほどして大乘仏教が登場し、般若経や Nāgārjuna（龍樹、AD150-250頃）が強調した。。

paśyati は、語根 $\sqrt{paś-}$ 「見る」の単数・第3人称・現在形である。これに過去を表す *sma* が付加された。ここで上記 *vyavalokayati* 「見極める」と同義語が重ねて使われている。

漢訳文では、梵語原文が十分に訳されていない。

◇梵語原文なし：度一切苦厄（仮訳：すべての苦悩や災厄を取り除く。）

「度」は「渡る」で、「越える」こと。この漢訳部分は、鳩摩羅什訳（412年頃）に既に付け加えられており、玄奘訳（649年頃）もこれに倣ったと考えるべきであろう。前の文章「すべてのものは、空である」で終わるより、すべてのものが実体がないのだから「苦悩や災厄がとり除かれる」と続けた方が、より説得力があるように思える。

❖ *iha Śāriputra rūpaṃ śūnyatā, śūnyatāiva rūpaṃ.* : 舍利子色即是空空即是色

【試訳】シャリプトラよ！この世では、物質は空性であり、空性とは物質に他ならない。

iha(adv.) は、「この世では」であるが、漢訳文にはない。*Śāriputra* は、*Śāri-*(f.) 「鳥名」 + *putra-*(m.) 「子供」で、合わせて仏陀十大弟子の一番弟子「シャリプトラ」のこと。どんな疑問でも解き「智慧第一」と言われる。これは呼びかけである。漢訳文では「舍利子」である。

rūpaṃ は、*rūpa-* 「物質」の中性・単数・主格である。梵英辞典では「外観」「形態」「現象」「色彩」などの意味があるが、それぞれ「眼でみえる物質の多様な状態」の一面を表しているにすぎない。一言「物質」で表現できる。漢訳文では単に「色」である。物質には、当然人間の肉体が含まれる。

śūnyatā 「空性」は、女性・単数・主格で、「空なる性質ないし特性」という意味である。梵語原文では、*śūnya-*(adj.) と *śūnyatā-*(f.) を区別しているが、漢訳文では両方とも「空」と訳され、区別していない。実際は「五蘊皆空」だけは「空」で、あとの8箇所の「空」は、本来は他の言葉で区別されるべきであろう。*śūnyatāiva > śūnyatā[^]eva* は、*eva*(adv.) が「他ならぬ」で直前の語を強調する。全体で「空性であるからこそ」の意味。

漢訳文では、下記「色不異空空不異色」が先で順序が逆になっている。

❖ rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ. : 色不異空空不異色

【試訳】物質は、空性と別々ではない。また空性は、物質と別々ではない。

ここでは、主語は śūnyatā と rūpaṃ で、rūpān と śūnyatāyā は奪格である。rūpān は、rūpāt (n. sg. Ab.) が、-t + n- > -n + n- と連声したもの。na(adv.) は、否定を表し、pṛthak-(adj.) は、「別々の」「異なる」を表す。ここでも śūnyatā 「空性」が、漢訳文では単に「空」である。

❖ yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpaṃ. : 漢訳なし

【試訳】物質なるもの、それは空性である。空性なるもの、それは物質である。

yad と yā は、関係代名詞。ともに what is ~ のように英訳し得る。sā と tad は、指示代名詞である。yad と tad は、中性・単数・主格の yat と tat が連声したもの。yā と sā は、女性・単数・主格である。梵語の関係代名詞の構文は、基本的には yad- 節（従属節）と tad- 節（主節）が組み合わされ構文を作る。この部分は、rūpaṃ śūnyatā, śūnyatāiva rūpaṃ（色即是空空即是色）の繰返しである。

❖ evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni. : 受想行識亦復如是

【試訳】感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もまた同様である。

evam(adv.) は、「このように」、および eva(adv.) は、「まさに」の意味で直前の語を強調する。この2語は、漢訳文では「亦復如是」となっている。

vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni は、3つの語幹と最後の複数形の単語で並列複合語を構成している。感覚器官（眼・耳・鼻・舌・身体・心：六根）が、未知のものに出会い何らかの刺激を受けて、自分の意志を確立し、はっきり「認識」するまでの四段階をいう。漢訳文では、単に「受想行識」である。しかし、それぞれ漢字一文字で内容を理解するのは難しい。

vedanā-(f.) は、語根が√vid-「知る」で、「苦痛」「感覚」の意味だが、最初の刺激を受ける「感知作用」のことをいう。漢訳文では、「受」である。

saṃjñā-(f.) は、saṃ-(pref.) が「完成」「共存」を表し、jñā-(f.) 「理解すること」と合わせて「意識」で、刺激の「知覚作用」のことをいう。漢訳文では、「想」である。

saṃskāra-(m.) は、saṃskāra > saṃ + s + kāra- で、saṃ-(pref.) が「完成」「共存」を表し、-s- は特別の意味を表す時に挿入される（辻, p.243）。kāra-(m.) 「行為」「行動」は、語根が√kr-「実行する」「作る」である。合わせて「完全にすること」「一緒にすること」「洗練すること」、すなわち心の「意志作用」である。漢訳文では「行」である。

vijñānāni は、vijñāna-「認識」「識別」「判断力」の中性・複数・主格で、総合的な判断や記憶・行動を伴う「認識作用」をいう。漢訳文では、単に「識」である。

❖ iha Śāriputra sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā : 舍利子是諸法空相

【試訳】シャリプトラよ！この世では、あらゆるものは、空性という特性をもつ。

iha Śāriputra については、上記参照。

sarva-(adj.) は、「すべての」。dharmāḥ は、dharma-「もの」の男性・複数・主格。語尾の-sが、śの前で絶対語尾形の-hに変わった。語根が√dhr-「保持する」である。大きく絶対世界と現象世界を表すものに分類可能だが、これには幾つかの意味がある。①

永久不変の真理・道理, ②正義・公正, ③秩序・道徳・慣習・規範・法律・宗教・仏陀の教説, ④有形無形の存在・事物, ⑤性質・性格・特性・特質・属性, ⑥仏教の礼儀。dharma- も漢訳の「法」も, 多様な意味をもち, 一言では表し切れない広く深い言葉である。それだけに難解で厄介な言葉でもある。ここでは④に該当する。

sarvadharma- は, 同格限定複合語で, 「あらゆるもの」「森羅万象」を表す。人間が感覚器官すなわち眼・耳・鼻・舌・身体・心で感じる「すべてのもの」である。感覚器官で感じる限り, 形のない「水」も, 眼に見えない「空気」も, 夢や妄想も含まれると解する。漢訳では, 「諸法」とか「一切法」と言われる。

śūnyatā-(f.) は「空性」。lakṣaṇā-(adj.) 「～の特性をもつ」は, 語根が√lakṣ- 「明記する」「表示する」である。有声音の前で -ās の s が脱落したもの。合わせて所有複合語を構成し, dharmāḥ を修飾するので, 全体で男性・複数・主格となる。漢訳文では「相」である。

❖ anutpannā aniruddhā : 不生不滅

【試訳】それらは生ずることもないし滅ぶこともない。

anutpannā は, an-(pref.) 「否定」 + ut-(pref.) 「外に」 + √pad- 「落下する」の過去受動分詞 anutpanna- の男性・複数・主格。有声音の前で -ās の s が脱落した。ut- は, ud- が無声音の前で変化した。ut-√pad- は「生じる」の意味となる。全体では「生じない」の意味である。

aniruddhā は, aniruddha- すなわち a-(pref.) 「否定」 + ni-(pref.) 「下方に」「中に」 + ruddha-(pp.) 「妨げられる」の男性・複数・主格で, 有声音の前で -ās の s が脱落した。ruddha- は, 語根√rudh- 「妨げる」「阻む」に -ta を加えてできた過去受動分詞。全体の意味は「障害のない」「支配されない」「自由意志のある」で, すなわち「滅ばない」の意味と解する。

なお対となる反対の意味の両方を否定する論法は, 一見すると矛盾している。これはこだわりを捨てるために矛盾する表現を重ね, 回りくどい表現をしている。niḥ-svabhāva 「無自性」を主張して, 「空」を説明する。

❖ amalāvimalā nonā na paripūrṇāḥ : 不垢不淨不増不滅

【試訳】汚れていることもなく浄いこともない。増えることもなく減ることもない。

amalāvimalā は, a + mala + a + vi + malā である。前半の amala は, a-(pref.) 「否定」 + mala-(adj.) 「汚れている」。後半の avimalā は, a-(pref.) 「否定」 + vi-(pref.) 「分離・反対」 + malā 「汚れている」で男性・複数・主格。語尾の -s が脱落した。直訳は「汚れを離れていることもない」。

nonā は, na + ūna- > nona の男性・複数・主格で, 語尾の -s が脱落した。na(adv.) 「否定」 + ūna-(adj.) 「不完全な」「欠けている」で, 全体としては「減らないこと」の意味。

paripūrṇāḥ は, pari-(pref.) 「充分に」 + pūrṇa- 「満たされた」。pūrṇa- は, √pr- 「満たす」の過去受動分詞。全体として paripūrṇa- 「増えるということ」の男性・複数・主格である。絶対語尾で -s が -ḥ となった。否定の na が前にあり, 「増えないこと」となる。

nonā 「減らないこと」と na paripūrṇāḥ 「増えないこと」は, 日本語の感覚としては「増える」が先で「減る」が後の方が自然なので, 梵語原文と順序を逆にした。

❖ tasmāc Chāriputra śūnyatāyām na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ. :
是故空中無色 無受想行識

【試訳】 シャリプトラよ！それ故に空性においては物質はなく、感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用はない。

tasmāc は「それ故に」で、Chāriputra 「シャリプトラよ」は、呼びかけであるが、漢訳文にはない。元の形は tasmāt + Śāriputra であり、-t + ś- > -c + ch- と連声した。連声前の tasmāt は、指示代名詞 tad- の奪格で、理由を表す（奪格の副詞化）。なお śūnyatāyā(f.sg.L.) 「空性」は、漢訳文では単に「空」である。na rūpaṃ は「物質はない」。

vedanā, saṃjñā, saṃskārā, vijñānaṃ については、上で若干触れた。ここでは、他が全部単数形であるが、saṃskārā だけが複数形である。これが通常複数形で用いられるからと解する。vijñānaṃ は、vijñāna-(n.) の単数・主格である。すべての名詞の主格に na(adv.) 「否定」を付けている。漢訳文でも最初に「無」を付けて全体を否定している。

❖ na cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi, na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-dharmāḥ. : 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法

【試訳】 眼・耳・鼻・舌・身体・心もなく、物質・音・匂・味・触・心の対象もなく、

na は、「否定」を表す副詞。cakṣuḥ は、cakṣus-(n.) 「眼」が、-s + ś > ḥ + ś- と連声した。śrotra-(n.) は「耳」、ghrāṇa-(n.) は「鼻」、jihvā-(f.) は「舌」、kāya-(m.) は「身体」すなわち「触感器官」。manāṃsi は、manas- 「心」の中性・複数・主格である。これは前の5つの語幹と並列複合語を構成する。このような感覚器官（六根）がないというもの。

rūpa-(n.) 「物質」は、すなわち「眼で見える対象」。śabda-(m.) 「音、声」は、「耳で聞こえる対象」。gandha-(m.) 「匂、香」は、「鼻で感じる対象」。rasa-(m.) 「味」は「舌で感じる対象」。spraṣṭavya-(n.) は、語根√sprāś- 「触れる」に未来受動分詞を作る -tavya を付加して「身体で触れられるべきもの」すなわち「身体で触れて感じる対象」を表す。

dharmāḥ は、dharma- の男性・複数・主格 dharmās が、絶対語尾で -s が -ḥ となった。ここでは、「心の対象」「心で感じる存在」の意味だが、結局「すべてのもの」と同じと解する。全体として前の5つの語幹と並列複合語を構成する。漢訳文では「法」。na(adv.) 「否定」により、感覚器官が感じる対象（六境）もないとなる。

❖ na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñāna-dhātuḥ. : 無眼界乃至無意識界

【試訳】 眼に映る世界はない。さらに心の認識する世界もない。

cakṣur は、cakṣus-(n.) 「眼」の語尾が、-s + (有声音) > -r と連声したものである。同様に dhātur は、dhātu- 「世界」の男性・単数・主格 dhātus が連声したものである。合わせて格限定複合語と考える。na(adv.) 「否定」が前にきて、全体で「眼に映る世界がない」となる。続く yāvan は、関係副詞で前後の語句を繋げる。yāvan は、yāvat(adv.) が連声して、-t + n- > -n + n- となった。

mano は、manas-(n.) 「心」の複合語形。vijñāna-(n.) 「認識」と dhātu-(m.) 「界」で、3語合わせて「心が認識する世界」となる。この男性・単数・主格 dhātus に絶対語尾の -ḥ が使われている。na(adv.) 「否定」が前にきて、全体を否定している。これも格限定複合語と考える。

❖ na vidyā nāvidyā : 前半 : 漢訳なし / 後半 : 無無明

【試訳】知識は存在しない。迷いや煩惱も存在しない。

na vidyā は, na(adv.)「否定」+ vidyā- (f.sg.N.)「知識」で, 合わせて「知識がないこと」すなわ「迷いや煩惱がある状態」となる。vidyā- の語根は, √vid-「知る」であり, veda-(m.)「知識」「ヴェーダ聖典」とも同根である。英語 wit, 独語 wissen とともに語源を共有している。

nāvidyā は, na + a + vidyā で, nāvidyā-「知識がないことはない」「迷いや煩惱がない」の女性・単数・主格。「知識のないこと」, 漢訳の「無明」は, 人間の最も根本的な煩惱。これは, dvādaśāṅga-(n.)「十二縁起(因縁)」の中で最初に説明されている。

❖ na vidyākṣayo nāvidyākṣayo : 前半 : 漢訳なし / 後半 : 無無明尽

【試訳】知識がなくなることはない。迷いや煩惱がなくなることもない。

na vidyākṣayo は, na(adv.) は否定を表し, vidyākṣayo は, vidyā-(f.)「知識」+ kṣaya-(m.)「滅亡」「喪失」の格限定複合語で, 全体としては男性・単数・主格。語尾が, -as + (有声音) > -o と連声した。漢訳文なら「無明尽」というところだが, 訳されていない。

nāvidyākṣayo は, na(adv.)「否定」+ a-(pref.)「否定」+ vidyā-(f.)「知識」+ kṣaya-(m.)「滅亡」の格限定複合語で, 男性・単数・主格。意味は「迷いや煩惱がなくなることはない」。

❖ yāvan na jarāmarāṇaṃ na jarāmarāṇakṣayo : 乃至無老死亦無老死尽

【試訳】ないし老いと死はない。老いと死がなくなることもない。

yāvan は, 関係副詞で前後の語句を繋げる。jarāmarāṇaṃ は, jarā-(f.)「老いること」+ marāṇa-(n.)「死ぬこと」の並列複合語で, 全体を一つとして中性・単数・主格である。

jarāmarāṇakṣayo は, (jarā + marāṇa) + kṣayo, 括弧内は並列複合語, 全体としては格限定複合語で男性・単数・主格である。老死は, 十二縁起の最後に説明されている。

❖ na duḥkha-samudaya-nirodha-mārgā : 無苦集滅道

【試訳】苦悩・根源・抑制・道筋はない。

duḥkha-(n.) は, 「苦悩」「不安」「痛み」「苦難」「心配」「悲しみ」などの意味がある。漢訳文では「苦」で, 生きることの苦しみ。「生老病死」を四苦, これに「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五蘊盛苦」を加えて八苦という。いわゆる「四苦八苦」である。

samudaya-(m.) は, sam + ud + aya で, sam は「完全」「共存」を表す接頭辞, ud は「上に」「外に」を表す接頭辞, aya-(m.) は「行くこと」。合わせて「収集」「集合」「結合」「原因」「根源」「元」などの意味があるが, ここでは「根源」とする。漢訳文では「集」で, ものが集まり作り出す根源すなわち煩惱。具体的には渴愛(抑え切れない欲望)を指す。

nirodha-(m.) は, ni + rodha で, ni-(pref.) は「下方に」, rodha-(m.)「阻止」は, 語根√rudh-「阻む」「妨げる」から派生した名詞である。これには「抑制」「征服」「制御」「克服」「阻止」などの意味があるが, ここでは「抑制」とする。「苦」を抑制すると, 悟りが開ける。漢訳文では「滅」で, 渴愛を滅した時の状態を指す。

mārgās は, mārga- の男性・複数・主格で, 前の3つの語幹とともに並列複合語を構成する。有声音の前では語尾の -s が脱落する。これには「道筋」「進路」「捜すこと」「た

どること」「方策」などの意味がある。ここでは「道筋」とする。これは理想の境地（悟り）に達するために追跡すべき「道筋」である。漢訳文では、単に「道」となっている。具体的には、「八正（聖）道」という八つの実践法すなわち「修行の基本」のことである。

漢訳文ではまとめて「苦集滅道」である。しかし、これらもそれぞれ漢字一文字で内容を理解するのは難しい。「無苦集滅道」は、結局「苦集滅道」とらわれていては悟れないという意味。これは「四諦」と言われる³⁾。

❖ na jñānaṃ na prāptiḥ. : 無智亦無得

【試訳】知ることがなければ、得ることもない。

「否定」を表す副詞 na が両方の語を修飾している。英語では“no pain, no gain”「苦勞しないと得るものもない」のような言い回しがあるが、これに似ている。

jñānaṃ は、ここでは jñāna- 「知ること」「理解すること」「知識」の中性・単数・主格。語根は√jñā-「知る」「理解する」である。prajñā-(f.)「智慧」によって得ることも含まれる。一方 vidyā-(f.) は、「知識」「学識」「科学」などで「知った結果」の意味合いがある。

prāptiḥ は、prāpti- 「得ること」「達すること」の女性・単数・主格。-s の代わりに絶対語尾 -h が使われた。これは pra-√āp-「獲得する」「到達する」+動作名詞を作る接尾辞 -ti。得るものは何か書いてないが、恐らく「悟り」だろう。漢訳文の「亦」に相当する梵語はない。

❖ tasmād aprāptivād bodhisattvānām prajñāpāramitām āsṛitya viharaty a-cittā varaṇaḥ. :

以無所得故 菩提薩埵依般若波羅蜜多故 心無罣礙

【試訳】それ故に得ることが何もないから、菩薩の智慧の完成のお陰で、人は、心を覆うものは何もなく暮らしている。

tasmād は、「それ故に」で、指示代名詞 tad- の奪格 tasmāt(adv.) が、連声して -t + (母音) > -d となった。これは奪格の副詞化である。漢訳文では「以」と表されている。

aprāptivād は、a-(pref.)「否定」+prāptitva-(n.)「得ること」である。-tva は名詞に添えられて「本質」「状態」などを表す抽象名詞を作る接尾辞。aprāptitva の奪格 aprāptivāt は、連声して aprāptivād となる。これも奪格で理由を表す。漢訳文では「故」である。

bodhisattvānām は、bodhisattva- 「菩薩」の男性・複数・属格である。この部分は、下記 viharaty の主語が「菩薩」か「人」かなどと様々な議論がある。主語は書いてないが、viharati- から単数・第3人称・現在形であることは分る。大乘の利他の観点から「菩薩」を主語にせず、「人」を主語にする説を採りたい。この「人」は、菩薩でなくとも、菩薩の智慧の完成のお陰で、あらゆるものが「空性」という「特性」をもつことを知った人であろうから、心を覆うものは何もなく、恐怖もなく安住していると考えられる。

prajñāpāramitām は、prajñāpāramitā- 「智慧の完成」の女性・単数・対格である。続く āsṛitya は、ā-(pref.)「近接」+語根√śri-「頼る」に接尾辞 -tya が付き絶対詞となり「頼りにして」。ここでは「～のお陰で」とする。漢訳文の「依」に相当する。

viharaty は、vi-(pref.) が「離れて」、haraty は harati が連声して、-i + (異なる母音) > y となった。harati は、語根が√hr-「取る」「奪う」である。ただし viharati- は、「暮らす」「住む」という意味となる⁴⁾。漢訳文には相当語がないが、その理由が分からない。

a-cittā varaṇaḥ は、a-(pref.)「否定」+ citta-「心」+ ā-(pref.)「近接」+ varaṇaḥ「覆い」である。citta- も varaṇa も、本来は中性であるが、全体は所有複合語となるので男性・単数・主格となる。漢語「罣」は「引っかける」、**礙**は、「覆うもの」の意味。

❖ cittāvaraṇa-nāstitvād atrasto : 無罣礙故 無有恐怖

【試訳】心を覆うものは何もないので、恐怖もない。

前半の cittāvaraṇa については、上項参照。nāstitvād は、nāstitva-(n.) > na[^]astitva- で、na が「否定」で、astitva- が、語根√as-「ある」「いる」の語幹 asti- に抽象名詞を作る -tva がついた。合わせて「存在しないこと」となる。その奪格 nāstitvāt が連声して -t + (有声音) > -d となる。奪格で、原因・理由を表す。

後半部分の atrasto は、a-(pref.) が「否定」、trasto が trasta-(pp.)「恐れている(こと)」の男性・単数・主格である。語根は√tras-「恐れる」「驚く」「震える」である。連声して -as + (有声音) > o となる。全体として「恐怖がない」「恐れていない」となる。

❖ viparyāsātikrānto niṣṭhanirvāṇaḥ : 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃

【試訳】誤った見解から離れており、永遠の悟りに入っている。

前半は、viparyāsa[^]atīkrānto である。viparyāsa- は、vi + pari + ā + √as- + a である。vi-(pref.) は「離れて」、pari-(pref.) は「周って」、ā-(pref.) は「こちらへ」、語根√as- は「上げる」、-a は名詞を作る接尾辞。結局「転倒すること」「誤った見解」で、男性・単数・主格である。

atīkrānto は、atīkrānta-(pp.) の男性・単数・主格で、ati-(pref.)「過ぎて」+ krānta-(pp.)「行った」である。語尾は、-as + (有声音) > -o と連声した。krānta- の語根は、√kram-「歩む」。合わせて「通り過ぎて」。全体としては「誤った固定概念から離れている」の意味となる。梵語原文に漢訳文の「一切」の部分はない。

niṣṭha- は、ni-(pref.)「～の中に」「～の下に」+ ṣṭha-(adj.)「立っている」「存する」で、合わせて「(～の状態に)ある」「～にいる」の意味である。

nirvāṇaḥ は、nirvāṇa-(pp.) の男性・単数・主格である。-s に代わり絶対語尾 -ḥ が使われた。nirvāṇa- > nir + vāṇa で、nis-(pref.)「～から離れて」が、母音または軟音の前で nir となる。vāṇa-「吹きかけられた」「吹かれた」は、語根√vā-「吹きかける」「芳香を放つ」「失う」の過去受動分詞である。意味は、「吹き消された」「消失・消滅した」状態をいう。ひいては「永遠の悟りに入っている」となる。nirvāṇa- は、漢訳文では音写で「涅槃」となった。ただし、nir + √vr-「覆いをとる」が語源という異説あり⁵⁾。

❖ tryadhvavyavasthitāḥ sarva-buddhā prajñāpāramitām āśritya[^] :

三世諸仏依般若波羅蜜多故

【試訳】過去・現在・未来の三世の仏たちは、智慧の完成を頼りにして、

try は、元来 tri-「三」で、異なる母音の前で語尾が連声した。adhva は、adhvan-(m.)「世」「時期」の複合形。vyavasthitā- は、vy + ava + sthita- で、vy は、vi-(pref.)「分離・反対」が連声したもの。ava-(pref.) は「下に、離れて」の意。sthita-(pp.)「～にいる」は、上項 ṣṭha-(adv.) と語根√sthā-「(ある状態などに)ある」を共有している。結局 vyavasthitāḥ は、vyavasthita-「近くにいる」の男性・複数・主格。語尾は、-s + (s-) > -ḥ と絶対語尾形

に変化した。

sarvabuddhās は, sarva-(adj.) 「すべての」 + buddha-(pp.) 「悟った (人)」の男性・複数・主格。語根√budh- 「目覚める」「悟る」から, budh + ta > buddha と過去受動分詞ができた。語尾の -s が脱落している。同格限定複合語となる。仏教では, 釈尊出生前にも「悟り」を開いた仏陀が複数いると考える。過去六仏と, 釈尊および未来仏「弥勒仏」をいう。修業中なので「弥勒菩薩」とも言う。漢訳文は「諸仏」である。

prajñāpāramitām は, prajñāpāramitā- 「智慧の完成」の女性・単数・対格である。また āsṛitya- は, 既述のように, ā-(pref.) 「近接」 + √śri- 「頼る」に -tya がついて絶対詞をつくり「頼りにして」となる。その語尾と次項の anuttarām の語頭と a + a > ā のように連声した。漢訳の「故」に相当する。この部分の漢訳は, 梵語の音写である。

❖ ^anuttarām samyaksambodhiṃ abhisambuddhāḥ. : 前半: 得阿耨多羅三藐三菩提 / 後半: 漢訳なし

【試訳】無上で正しく完全な悟りを得ている。

anuttarām(adj.) は, an + uttarām である。an-(pref.) 「否定」, uttarām が ud 「上に」の比較級で「より上に」の女性・単数・対格である。合わせて「無上の」「これ以上ない」となる。

samyak-(adj.) 「完全な」は, samyañc の複合形である (Monier, p.1181)。sambodhiṃ は, sambodhi- 「正しい目覚め」「正しい悟り」の女性・単数・対格である。

abhisambuddhāḥ は, abhi + sam + buddhāḥ で, abhi-(pref.) は, 動作の方向を表し, sam-(pref.) は, 「完成」を表す。buddhāḥ は, 過去受動分詞 buddha- 「悟った」の男性・複数・主格で, -s が絶対語尾で -ḥ となった。全体としては, 「完全な悟りを得た」となる。この部分は, 漢訳文にないが, その理由が分らない。なお漢訳文の大半は, 梵語原文の音写である。

❖ tasmāḥ jñātavyaṃ prajñāpāramitā- : 故知般若波羅蜜多

【試訳】それ故に知るべきである。智慧の完成は,

tasmāḥ は, tasmāt(adv.) 「それ故に」が, -t + j- > -j + j- と連声した。奪格の副詞化については既に上で述べた。続く jñātavyaṃ は, 語根√jñā- 「知る」 + tavya > jñātavya 「知られるべきである」(未来受動分詞) の中性・単数・主格。

prajñāpāramitā(f.sg.N.) 「智慧の完成」については, これを主語にして, 次の4つの mantrō を述語にして解釈してみる。

❖ mahāmantrō mahāvīdyāmantrō 'nuttaramantrō 'samāsama-mantraḥ. :

是大神呪 是大明呪 は無上呪 は無等等呪

【試訳】大いなる真言であり, 大いなる悟りの真言であり, 最高の真言であり, 比類のない真言であり,

mahāmantrō は, mahā + mantra で, mahā- は, mahat-(adj.) 「大いなる」の複合形である。これは「摩訶不思議」の「摩訶」のことである。mantrō は, mantra- 「真言」「呪文」「呪い」「祈り」の男性・単数・主格。語尾は, 連声して -as + (有声子音) > -o となる。

なお漢訳文の「神」に相当する語が梵語原文にないが, 翻訳者(玄奘)が「神」を追

加した。漢訳文の「是」は、「これは」の意味だが、梵語原文にはない。

mahāvīdyāmantra は, mahā-(adj.)「大いなる」+ vidyā-(f.)「知識」+ mantra-(m.)「真言」で, mantra の語尾は, 連声して -as + a- > -o となる (語頭の a は消滅)。vidyā は, 「知識」すなわち「智慧によって得た知識」なので, 「悟り」としてみる。

anuttaramantra は, 上述のように, anuttara の語頭の a が, 発音上の理由で脱落した。しかし意味は脱落しない。an-(pref.)「否定」+ uttara(adj.)「より上に」+ mantra(m.sg.N.)「真言」。結局 anuttara は「これ以上ない」「最高の」という意味となる。mantra の語尾は, 同様に連声して -as + a- > -o となる (語頭の a は消滅)。

asamasamantraḥ は, 上記と同様に, asamasama の語頭の a が, 発音上の理由で脱落したが, 意味は脱落しない。a-(pref.) は「否定」, samasama は, sama-(adj.)「等しい」が繰返されたもの。合わせて「比類のない」となる。mantraḥ は, 絶対語尾で -s が -h となった。同じような言葉を何回か繰返すことで効果が増す。漢訳文では「無等等」である。

❖ sarvaduḥkhaśāmanāḥ : 能除一切苦

【試訳】すべての苦しみを鎮めている。

sarvaduḥkha-(n.) は, sarva-(adj.)「すべての」+ duḥkha-(n.)「苦悩」で, 「すべての苦しみ」, pra-(pref.) は「あなたに」「前方に」で, śamana-(adj.) は, 「鎮めている」。この語根は √śam-「鎮める」である。したがって śāmanāḥ は, śāmana-(adj.)「(あなたに)鎮めている」の男性・単数・主格である。語尾の -s が絶対語尾で -h になった。「鎮めている」は, 漢訳文では「能除」。「能」は可能を表すが, 梵語原文には相当語がない。

❖ satyam amithyavāt prajñāpāramitāyām ukto mantraḥ, tad yathā :

真実不虛故 說般若波羅蜜多呪 即說呪曰

【試訳】それは, 真実であり嘘がないため, 智慧の完成の時に, この真言は, 次のように誦まれる。すなわち :

satya-(adj.,n.)「真実」「真理」は, 語根√as-「ある」「存在する」の現在分詞 sat- に接尾辞 -ya がついて出来た抽象名詞の中性・単数・主格。

amithyavāt⁹⁾ は, a-(pref.)「否定」+ mithya(adv.)「誤って」+ tva「抽象名詞を作る接尾辞」で, 合わせて amithyatva-「嘘がないこと」の中性・単数・奪格で, 理由を表している。

prajñāpāramitāyām「智慧の完成」は, 女性・単数・処格である。ukto は, 語根が√vac-「言う」の過去受動分詞 ukta- の男性・単数・主格 ukta の語尾 -as が連声変化した。

mantraḥ は mantra-「真言」の男性・単数・主格で, -s が絶対語尾形 -h となっている。tad「それ」は指示代名詞 tat が, -t + (有声音) > -d となる。yathā「次のように」は, 接続詞。

❖ gate gate pāragate pāra-saṃgate bodhi svāhā : 揭帝揭帝般羅揭帝般羅僧揭帝 菩提僧莎訶

【試訳】行った, 行った, 彼岸に行った。彼岸へ完全に行き着いた。悟りよ, 幸いあれ!

gate には, 少なくとも3つの解釈がある⁷⁾。①語根√gam-「行く」「着く」の過去受動分詞 gata- の男性・単数・処格で非人称絶対処格構文。②過去受動分詞 gata- の女性形 gatā-「行く人」の単数・呼格。③ gati-「行くこと」の女性・単数・呼格。②と③では prajñāpāramitā (f.)「智慧の完成」を, 女性尊格として呼びかける。

pāra-saṃgate は, pāra-(adj.)「向こうへ」「彼岸に」, saṃ-(pref.)「完成」, gate と合わせて「完

全に彼岸に行き着いた」という意味となる。

bodhi-(m.,f.)「悟り」は、女性名詞 bodhī の単数・呼格で問題ないが、男性名詞ではどの数・格でも該当しない。従って文法的には上記②と③が正しいとの見方があるが、この呪文の箇所は、梵語として正規でないとの説もあるので、柔軟に考えてみたい。音写とするのが一番無難ではあるが、svāhā は、祈祷の終わりに用いるもので、「幸いあれ！」である。

漢訳者がこの部分を訳さず音写にしたのは、呪文だから訳さない方がいいという理由の他、決定的な訳が不可能という理由があるようだ⁹⁾。

❖ iti Prajñāpāramitā-hṛdayaṃ samāptam. : 般若波羅蜜多心経

【試訳】『般若心経』が完結した。

iti(adv.) は、色々な意味があるが、ここでは引用符の意味と解釈する。

Prajñāpāramitā-hṛdayaṃ は、Prajñāpāramitā-(f.)「智慧の完成」+ hṛdaya-(n.)「心」「心臓」で、格限定複合語となる。合わせて Prajñāpāramitā-hṛdaya の中性・単数・主格。直訳は『智慧の完成の心』であるが、ここでは日本でよく知られている『般若心経』とする。『般若心経』は、お経ではなく膨大な『般若経』600余巻のうち『摩訶般若波羅密経』（『大品般若経』）の「神髄」を纏めたものとする見方があるが、確かに「心臓」にはものごとの「中心」「芯」「核心」という意味がある。hṛdaya は、英語の heart および core とともに同じ語源を共有する⁹⁾。

samāptam は、sam-(pref.)「完成」+ 語根√āp-「達する」の過去受動分詞 āpta- の中性・単数・主格である。全体として「完結した」。

4. 日本語訳の試み

上記の語句・文章の試訳を統合すれば、全体として次のような日本語試訳となる。

<日本語試訳>

全知の人に礼。

聖なる観自在菩薩は、深い智慧の完成の修行を実践していた時に、

五つの要素があると見極めた。それらは、その本性において空であると見抜いた。

シャリプトラよ！この世では、物質は空性であり、空性とは物質に他ならない。

物質は、空性と別々ではない。また空性は、物質と別々ではない。

物質なるもの、それは空性である。空性なるもの、それは物質である。

感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もまた同様である。

シャリプトラよ！この世では、あらゆるものは、空性という特性をもつ。

それらは生ずることもないし滅ぶこともない。

汚れていることもなく浄いこともない。増えることもなく減ることもない。

シャリプトラよ、それ故に空性においては物質はなく、

感知作用・知覚作用・意志作用・認識作用もない。

眼・耳・鼻・舌・身体・心もなく、物質・音・匂・味・触・心の対象もなく、

眼に映る世界はない。さらに心の認識する世界もない。
知識は存在しない。迷いや煩惱も存在しない。
知識がなくなることはない。迷いや煩惱がなくなることもない。
ないし老いと死はない。老いと死がなくなることもない。
苦悩・根源・抑制・道筋はない。知ることがなければ、得ることもない。
それ故に得ることが何もないから、菩薩の智慧の完成のお陰で、
人は、心を覆うものは何もなく暮らしている。
心を覆うものは何もないので、恐怖もない。
誤った見解から離れており、永遠の悟りに入っている。
過去・現在・未来の三世の仏たちは、智慧の完成を頼りにして、
無上で正しく完全な悟りを得ている。
それ故に知るべきである。智慧の完成は、大いなる真言であり、
大いなる悟りの真言であり、最高の真言であり、比類のない真言であり、
すべての苦しみを鎮めている。
それは、真実であり嘘がないため、この真言は、智慧の完成の時に次のように誦まれる。
すなわち：
行った、行った、彼岸に行った。彼岸へ完全に行き着いた。悟りよ、幸いあれ！
『般若心経』が完結した。

5. 英語訳の試み

上記の日本語試訳を英訳したものである。参考用の独語試訳も同様である。

<英語試訳>

Bow to the omniscient!

When the holy Avalokitesvara Bodhisattva was performing the practices for the deep perfection of wisdom, he perceived that there are five elements and ascertained that they are all empty in their nature.

Here, Shariputra, material is emptiness and emptiness is surely material; material is not different from emptiness and emptiness is not different from material. What is material, that is emptiness and what is emptiness, that is material. So are sensing, imagining, willing and recognizing.

Here, Shariputra, all things are characterized by emptiness: they do not appear and they do not disappear; they are neither impure nor pure; they do not increase or decrease.

Shariputra, therefore, in emptiness, there is no material and no mental activity: sensing, imagining, willing, recognizing; no sense organs: eye, ear, nose, tongue, body, or mind. There are neither such objects of sense organs as material, sound, odor, taste, touch, and object in mind, nor eye realm to recognition realm in mind.

Knowledge does not exist. Nor does ignorance. Extinction of knowledge does not exist. Nor does that of ignorance. So there is no aging or death; there is no extinction of aging or that of death. There are no agony, no cause, no control and no course. Accordingly, no gaining without knowing.

Because there is nothing to attain, therefore, a man lives without what covers his heart thanks to the perfection of wisdom by Bodhisattva, and therefore there is nothing to cover his heart and he is free from fear. He overcomes dreamlike delusion and attain to the ultimate Nirvana.

All Buddhas in the past, present and future have properly awoken based upon the perfection of wisdom and attained to the great, right and perfect enlightenment.

Therefore one should know that the perfection of wisdom is the grand spell, the great spell of enlightenment, the ultimate spell, the peerless spell, which is allaying all pains; because it is truth and no falsehood, the spell is chanted at the perfection of wisdom. That is as follows:

“Gone, gone, gone to the other shore, and completely landed on the other side. Congratulations on the enlightenment!”

“The Prajnaparamita Heart Sutra” ends.

<独語試訳> : 参考用

Verbeugung zum Allwissenden!

Als der heilige Avalokiteschvara Bodhisattva sich in den Übungen für die tiefe Vervollkommnung der Weisheit übte, hat er angesehen dass es die fünf Elemente gibt und weiter festgestellt dass sie alle leer im Wesen sind.

Hier, Schariputra, Material ist Leere und Leere ist sicher Material, Material ist nicht verschieden von Leere, und Leere ist nicht verschieden von Material. Was Material ist, das ist Leere, und was Leere ist, das ist Material. Gleich sind geistige Aktivitäten: Empfinden, Vorstellen, Gestalten und Erkennen.

Hier, Schariputra, alle Gegebenheiten sind eigentümlich Leere. Sie zeigen sich nicht und verschwinden nicht. Sie sind nie schmutzig und nie rein. Sie nehmen weder zu noch ab.

Schariputra, also gibt es in Leere kein Material und kein geistige Aktivitäten: Empfinden, Vorstellen, Gestalten, Erkennen; kein Sinnesorgane: Auge, Ohr, Nase, Zunge, Körper, Geist; keine Objekte von Sinnesorgane: Material, Ton, Geruch, Geschmack, Gefühl und Objekt im Geist; keine Augenwelt und keine Erkennenwelt im Geist.

Es gibt weder Kenntnis noch Unkenntnis. Und es gibt weder Erlöschung der Kenntnis noch Erlöschung der Unkenntnis. Es gibt also kein Altern, keinen Tod, und auch keine Erlöschung von Altern und Tod. Es gibt keine Leiden, keine Ursach, keine Kontrolle,

keinen Kurs, und kein Gewinnen ohne Kennen.

Weil es nichts zu erzielen gibt, also, wohnt man ohne was das Herz bedeckt dank der Vervollkommnung der Weisheit von Bodhisattva, so es gibt nichts das Herz zu bedecken und es steht ihm frei mit der Furcht. Er überwindet die Täuschung und erreicht das endliche Nirwana.

Alle Buddhas in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft haben von Vervollkommnung der Weisheit wegen richtig aufgewacht und die große, echte und vollkommene Erleuchtung erzielt.

Also muss man verstehen: die Vervollkommnung der Weisheit ist der große Spruch, der große Spruch für Erleuchtung, der endliche Spruch, der ungleichbare Spruch, der alle Leiden löscht. Weil es Wahrheit und keine Unwahrheit ist, wird der Spruch an der Vervollkommnung der Weisheit rezitiert. Das ist wie folgt:

An die andere Küste gegangen, gegangen, gegangen und auf der anderen Seite vollkommen gelandet. Herzlichen Glückwunsch zur Erleuchtung!

“Das Prajnaparamita Herz Sutra” endet.

<資料>漢訳文

漢訳文には、幾つか知られているが、ここでは玄奘訳（649年頃）のみを掲げる。

『般若波羅蜜多心経』（玄奘訳）

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。
色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舍利子。
是諸法空相。不生不滅。不垢不淨不增不減。是故空中。無色。無受想行識。
無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明尽。
乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。
依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。
究竟涅槃。三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。
故知般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。
能除一切苦。真實不虛故。說般若波羅蜜多呪。即說呪曰。
揭帝揭帝般羅揭帝。般羅僧揭帝。菩提僧莎訶。
般若波羅蜜多心経 <大正蔵，第8卷848頁下。旧漢字を新漢字に改めた>

参考文献・辞典

梶山雄一（1992）『空入門』春秋社

勝又俊教・古田紹欽編（1999）『大乘仏典入門』大蔵出版

金沢 篤（2010）「梵文『般若心経』（小本）の「空」」『駒沢大学仏教学部研究紀要』68号

———（2011）「色即是空, 空即是色の論理—梵文『般若心経』（小本）の「空」（2）—」『インド論理学研究』第2号

- 上村勝彦・風間喜代三 (2010) 『サンスクリット語・その形と心』三省堂
ゴンダ, J. 著 鎧淳訳 (2009) 『サンスクリット語初等文法』春秋社
佐々木教悟他 (1966) 『仏教史概説インド篇』平楽寺書店
鈴木勇夫 (1980) 『般若心経の研究』中部日本教育文化
高崎直道 (1991) 『唯識入門』春秋社
立川武蔵 (2001) 『般若心経の新しい読み方』春秋社
玉城康四郎 (2003) 『華嚴入門』春秋社
辻直四郎 (1974) 『サンスクリット文法』岩波書店
中村 元 (2001) 『仏典をよむ3 大乘の教え (上)』岩波書店
—— (2001) 『仏典をよむ4 大乘の教え (下)』岩波書店
—— (2002) 『龍樹』(学術文庫), 講談社
中村元・紀野一義訳注 (2001) 『般若心経・金剛般若経』 <ワイド版>岩波書店
西嶋和夫訳 (2006) 『中論 [改訂版]』金沢文庫
早島鏡正他 (1982) 『インド思想史』東京大学出版会
原田和宗 (2010) 『「般若心経」成立史観』大蔵出版
平川 彰 (1992) 『仏教入門』春秋社
正木 晃 (2011) 『般若心経』西東社
松長有慶 (1991) 『密教』岩波書店
松本史朗 (1989) 『縁起と空』大蔵出版
宮坂宥洪 (2004) 『真釈般若心経』角川書店
寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』研究社
中村 元 (2010) 『広説佛教語大辞典』東京書籍
荻原雲来編 (1986) 『漢訳対照梵和大辞典』講談社
水野・中村他編 (1978) 『仏典解題事典』春秋社
Edgerton, Franklin (2010), *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, New Haven
Monier-Williams, Sir Monier (2008), *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford: OUP
Onions, C.T. ed. (1996), *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford: OUP

〔注〕

- 1) 勝又・古田『大乘仏典入門』pp.14-15および立川『般若心経の新しい読み方』p.105。
- 2) 六波羅蜜とは、布施 (dāna)・持戒 (śīla)・忍辱 (kṣānti)・精進 (vīrya)・禅定 (dhyāna)・智慧 (prajña) をいう。
- 3) 「諦」は、「真実」や「真理」の意味である。4つの真理「苦諦」「集諦」「滅諦」「道諦」すなわち四諦により「悟り」に至ることを「声聞乗」という。これは仏陀から直接、仏滅後には仏の説法を説く者から教えを聞き、自分のみの悟りを目的する修行方法。
- 4) F. Edgerton, p.504に lives, dwells, spends one's time と記載がある。

- 5) 松本『縁起と空』 pp.194-211。
- 6) 中村・紀野によれば、法隆寺貝葉本には *satyam amithyatvāk* とあり、Max Müller が、これを *satyam amithyatvat* に修正したとある（中村・紀野、前掲書、p.187）。
- 7) ①鈴木、前掲書、pp.9-11参照。①と②中村・紀野、前掲書、pp.36-37参照。②と③原田『『般若心経』成立史観』 p.354参照。
- 8) 「この真言は、文法的には正規のサンスクリットではない。俗語的な用法であって種々に訳し得るが、決定的な訳出は困難である」（中村・紀野、前掲書、p.36）。
- 9) Onions によると印欧語族の語源として *kerd* や *krd* があり、*gherd* を経て、ヨーロッパでは、英語の *heart* 系と *core* 系とに分かれた。*heart* と同系が、独語 *Herz*、蘭語 *hartje* など、*core* と同系には希語 *ker*、仏語 *cœur*、伊語 *cuore*、西語 *corazon* などがある。

(Abstract)

It is assumed that the Prajnaparamita Heart Sutra was written as one of massive Prajñāparamitā-sūtras in the formation process of Mahayana Buddhism in A.D. 2-4 centuries. It was about 600-700 years after the Nirvana of Buddha. The author, year and place of writing are unknown. This sutra is the most popular in Japan. However, the Chinese version (Xuanzang translation) is usually chanted in Japanese way partly because Sanskrit is a quite difficult language and partly because most of the Japanese can read or understand the Chinese version more or less. But it should be once read in Sanskrit original version. Sanskrit and Chinese are quite different from each other in the respect of grammar or way to express letters: phonogram and ideogram. From time to time the author feels that Sanskrit is somewhat similar to English, German, French etc. in words or grammar because they belong to the same language family: Indo-European. But he never finds such similarity in Chinese. Therefore it is most significant to read the sutra not indirectly via Chinese translation, but directly from Sanskrit. The purpose of this article is to peruse the original Sanskrit version, and to make elaborate commentary on it and translate it into Japanese mainly with major Sanskrit-English dictionaries such as *Monier-Williams and Edgerton*. And both the English and German trial translations are based upon the author's Japanese translation.

<あとがき>

本稿には、自分では気がつかない誤りが散在しているかもしれない。読者・識者の御叱正を仰ぎたい。